

# 聖霊の満たしと自我の死について

「バーネットの聖化論の今日的意義について」

## 目 次

はじめに

第1章 「回想」にみるバーネットの二つの信仰上の課題について

第2章 聖霊の満たしと聖書信仰の深まりについて

第3章 自我の死と聖書信仰

まとめ

## はじめに

1999年1月、学院委員長神山和典師は、福音伝道教団「聖化論の再構築」第一次答申前文に於いて、「福音伝道教団・聖化論の検証」の方が適当ではなかったかと考える次第です」と語られました。

そこで、2001年6月、牧師会において、聖化論の検証が必要で不可欠であることを認めた上で、その結果によっては、単純に福音伝道教団の聖化論を再確認するだけではすまない場合がありうるので、やはり取り組むべき課題は「聖化論の再構築」とすべきである旨、改めて教団総会の議決を守ることの大切さを述べさせていただきました。

その後、2002年10月、開催された教師会に於いて「聖化論の再構築について(21世紀日本戦況の課題を担うために)」と題して、以下の順序に従って発題をさせていただきました。

第一に、聖化論の再構築を提案するに至った経緯

第二に、私が受容した福音伝道教団の聖化論

第三に、聖化論再構築不必要論についての反論

第四に、バーネットの聖化の理解の問題点、福音伝道協會規則に見られる福音理解の問題点、ケジックの聖化論の問題点等について

第五に バーネットの提唱していた「思い」(思想の製造所)の聖化の掘り下げの有益性について

その後も、再構築をめぐる、今日まで各先生方がいろいろと検討をしてきました。去る9月8日(金)開催された第49回学院教師会において「聖化論の再構築に関して」話し合いがなされた折、歴史神学的な視点からバーネットの「聖霊の満たしと聖書信仰」について幾つかの資料に基づいてお話をさせていただきました。数日して学院委員長神山和典師から、10月開催される教師会に於いて、第49回の学院教師会にて小生が話しました内容をさらに整えて、発題をしていた

だきたい旨の要請がありました。

そこで、今回さらに、聖化論の再構築について「その 」として、バーネットの「聖霊の満たし」と「自我の死」について、「バーネットの聖化論の今日的意義について」歴史神学的視点から発題をさせていただきます。

## 第1章 「回想」にみるバーネットの二つの信仰上の課題について

### 1) 内住の罪の問題

#### 回想3

1885年(明治18年)7歳の時、「高ぶり、怒り、偽り」等、ローマ人への手紙7章の内住の罪との戦いを意識しはじめ、「私の生涯は『この死の身体から誰が救ってくれることができるだろうか』という一つの長い叫びになりました。」そして「残念ながらその回答について当時だれからも教えられていませんでした。そしてついにその解答を見出したのは26才(1904年)の時(回想11)でした」と述べています。

但し、「罪の赦しを受け、新生したのはいつだったかはっきり言うことが出来ません。」「この救いの経験が7歳の時であったから8歳の時であったかはっきり覚えていません」又、回想13では「わたしは9歳の時回心し」ました。と言っています。従って、バーネットは、所謂救われたという自覚を持った年齢は不明確ですが、回想3では、7・8才の時から「寝る前に一日の間にした悪い事を言いあらわさないで、又、キリストの十字架によって赦されたということを信じないで寝ることはありませんでした」と語っているところから、罪の赦しは確信していたと考えられます。

そこで、バーネットは罪赦されたという自覚は少なくとも7才~8才の時で、救われているという自覚を持ったのは9才だったと理解することができるのではないのでしょうか。しかし、7才の時からローマ人へ手紙7章に記されている内住の罪との戦いを意識しはじめたのも確かです。

#### 回想4

恐らく7・8才の頃だと推測しますが「キリストの十字架を信じ罪ゆるされてた私でした、罪に対する勝利の道はまだ分からず、年が過ぎるに従ってこれらの意識や潔められていない心の兆候がますます増してきましたが、そこからの救い

を得る方法が全然わかりませんでした。」とありますし、回想7によれば、「母の死から26才になるまでの内的な苦しみの状態を思い返す時、わたしはできるかぎり多くの人々に『聖霊の満たし』についてのすばらしい真理を伝えたいと思います」と述べていることから、特に、母の死、即ち1891年、13才から年を重ねるごとに、内住の罪との戦いに於ける敗北感はひどくなって行ったようです。

#### 回想4

1893年15才の時には「私の心は汚い池のようなものである。それをかきまわすほど汚くなってゆく、だれかきてその尊い血潮で私を潔めてくださる必要がある」と内住の罪との戦いは悪化していきました。

#### 回想7

「私の心の中には霊的な誇りが満ちており、それも表面は敬虔な言葉でおおわれていた誇りでした」「私の中に無意識のうちに主に捧げていない意志と捨て切れない自我とがあったことです。」「霊的戦いの中で本当の自分の姿を見出すまで長い苦しみの暗さから助けてくれる人がいなかったことは良かったことかもしれません」と述べていて、内住の罪との戦いとは自我との戦いであるということ意識し始めたようです。

#### 回想8

1893年15才の時オックスフォード・ジュニアで学びはじめます。この時代、観劇も小説も道徳的内容のものならば良いとの助言を受け、ロンドンの劇場に行くようになります。彼女にとって観劇は内住の罪との戦いの対象でもありました。又、道徳的テーマの本を読むが、信仰は弱められていき、具体的な罪との戦いを意識し始めているようです。

又、この時代、学校の助手から聖書批評の立場を教えられ、今まで経験してきた道徳倫理的な意味での内住の罪との戦いの他にさらに高等批評という新しい信仰の課題で悩むようになります。そして信仰が崩れていきました。

## 回想 10

バーネットはやがて1895年17才からオックスフォードのシニアに、その後、ホワイト・ランス・レディス・カレッジ（ロンドン大学の教員養成訓練専門学校）を卒業し、2年間の見習いの後、ブレントウードの近くのチルダーデッチにある小学校の校長として、1912年北西約150km離れたところにあるレスター市のクライスト・チャーチのデイカネス（婦人伝道者）として転職するまで父親を助けながら勤務しました。

## 回想 11

1904年（26才）8月、ダブリンの教会に奉仕に行った父親の代わりに、インドの宣教師夫妻がチルダーデッチの教会の牧会を8月一杯滞在して奉仕をしました。この宣教師夫妻が去った後、宣教師夫人が置いていったリーダー・ハリス夫人の書いた『聖霊の満たし』はどういうふうにうけるのか」という小冊子を読んで、そこに進められている三つのステップを信仰によって受け入れ、その晩、聖霊の満たしを経験しました。

リーダー・ハリスは、1891年、以下にあるように3つの目的をもって、リーグ・オブ・プレイヤー（祈りの連盟）を設立した人であり、「どのようにして不可知論になったか、どのようにして神はすくってくださったか」を書いています。

全てのクリスチャンに聖霊の満たし

教会にリバイバル

全世界に聖書的聖潔の浸透

このリーグ・オブ・プレイヤーは、フェイスミッション、JEBらと深いかわりを持ちながら、英国のホーリネス運動の一翼を担っていました。

又、この後回想18、1915年、バーネットが内住の罪から全く救われる経験をするダービシアのソニック（スオニック）の聖会は、祈りの連盟（リーグ・オ

ブ・プレイヤー)主催、日本伝道隊(JEB)協賛で開催される聖会です。

日本伝道隊(JEB)は、1903年ケジック聖会最中(バックストン、パッジ  
ェット・ウイリクス、ハーバード・ウッド等)半徹の祈祷会の中で誕生し、イギ  
リス リトルハンプトンにて設立されてとされている。(時のケジックの議長アル  
バート・ヘッドが責任者の中にいます。)

## 回想12

聖霊に満たされ後、悪習慣である飲酒の問題にぶつかります。バーネットは「絶  
対禁酒主義であるようには育てられなかった」ので、飲酒の習慣があったよう  
です。しかし、この飲酒の習慣と戦い、やがて勝利を得たようです。

## 9 回想13

1904年の11月「劇場へ行っても主イエス様のことを考えることができる  
なら良いがそうでなければ行かない方が良い」と言う友人言葉を試すためにロン  
ドンの劇場に観劇に行きます。しかしその後観劇にも行かないようになりました。  
さらに、小説、トランプ等段々しなくなって、当時の所謂悪習慣から解放されて  
いったようです。

## 10 回想16

聖霊の満たしの経験から5年後の1909年、はじめてケジック聖会に出席し  
ます。この頃、「聖霊の満たしの経験からもどることはなかったが、内住の罪から  
全く救われる経験はまだ受けていませんでした。」「それで、この方々のメソジス  
ト的な説明の中に、私が長いこと求めていたものの秘訣があるのではないかと、  
その先生方の話や書いたものを許される限りお聞きしたり読んだりしました」と  
述べています。

## 11 回想18

内住の罪からの解放について、レスター市で奉仕をしていた1915年、聖霊の

満たしの経験をしてから11年目、37才の時、ダービシアのソニック（スオニック）聖会に出席し、「内なる罪から全く救われることを信仰によって」経験します。そして「第一ヨハネ1章7節とガラテヤ2章20節の本当の意味を初めて経験」し、「今までの間違った神学とその結果である不信仰から全く救われました。」

その時の経験についてバーネットは「1904年の危機の時と同じくらいはっきりした経験」で、「罪の根絶」に近い用語を使ってしまうが、その後、この用語が聖書的でなく、その危険性を知り「罪の根絶」という用語を使うことをやめます。

さらに「罪の根絶」という言葉は、「『内住の救い主と共に死んで葬られ、甦って主と一体なる』ことよりも、『経験ときよめられた人格を強調』するためにクリスチャンの高い人格を生み出さないことを知り」ます。

そしてケズイックのエバン・ポプキンス師やチャールズ・インウッド師等が使っていた「相殺説」（おそらく対抗、中和説（Counteraction）だろう）という理論」についても「『根絶説』よりも聖書的であるかどうか、私には大きな疑問で、その説には心理が含まれていますが、すべての真理が含まれているとは思」わないと述べ、もし用語を使うとすれば聖書の一番近い用語は「合一説」という言葉ではないかと述べています。

但し、後で述べるが、1904年聖霊の満たしの時の第二ステップがガラテヤ人への手紙2章20節の自我の死と内住のキリストの受容の信じます。その意味では、この時既に「罪からの解放」を経験したのではないのでしょうか。

しかし、深い意味での自覚と言う点で、1915年のこの時の経験に至ったというべきでしょう。

「この用語とその理解は、小島伊助師と同じ理解であることがわかります。厳密にはバーネットが先に使ったのものか。それとも小島伊助師なのか。それとも二人が共に使っていたのかもしれません。調査の必要があるでしょう。戦前の福音



伝道協会の年会の講師としてほとんど来ています。」

## 第2 聖書批評学（聖書信仰）の問題

### 1 回想8、9、10

1893年15才の時オックスフォード・ジュニアで学びはじめます。そして2年後のオックスフォードシニヤ、その後、ホワイト・ランス・レディス・カレッジ（ロンドン大学の教員養成訓練専門学校）で学び、2年間のロンドンの中学校で見習いを経て1912年（回想16）まで、チルダーディチで教員となります。

この間、聖書批評学の影響を強く受けて聖書信仰から離れます。

### 2 回想8

「助手をしている先生は聖書批評家で聖書そのものを教えず、あらゆるところへ疑いを入れ、その害毒はわざとではなかつたかもしれませんが、あらゆるところへ入ってきました。私の霊的生活の土台はくずれはじめました」又「聖書批評家の本や道徳的テーマについての本を読んでいくうちにますます私の信仰は弱められていった」と述べています。

### 3 回想10

村の小学校にの校長になった頃「学生時代に蒔かれた不信仰の種が私に悪い実を結ばせ、わたしは本当の信仰をもっているのかと考え始めました」又「聖書批評家たちが書いた読みものが私の信仰の土台をくずしてしまい、神の存在さえも疑うほどになって」しまいます。されに「聖書の初めから終わりまで神の言葉と信じるのか、あるいは無心論者となるのか、どちらからであるということでした」と述べています。されに「霊的苦しみの故に、自分の顔を鏡で見て気違いになっているのではないかと思った程です」「それでもこの戦いをやめて神から全く離れてしまうことは私にとって全く不可能なことでした」と言っています。この時期

は相当信仰が変になっていることがわかります。

#### 4 回想 1 1

1904年(26才)の時、すでに述べたように、聖霊の満たしを経験しました。その結果「神の言葉への疑い、高教会の考え方に傾くこと、世的な考え、などが夜の霧が朝日のまえに消えるように、私の心の中から消え去っていきました。わたしにとって聖書は新しい本になりました」と述べています。

聖霊の満たしこそ、バーネットの聖書批評学の問題を解決し、聖書信仰の復興となったのです。

#### 5 回想 1 2

その後、「偶像礼拝の世界に対して、御霊の力と働きが示され、真の悔い改めと新生が生じるのは、霊的純福音の人たちの働きの中であることがわかりました。それは高教会の教えと、やり方と全く縁を切って今ではある意味で軽んじていた純福音の集まりへ、霊的生涯の深みを求めて出席し始めました。」

## 第2章 聖霊の満たしと聖書信仰の深まりについて

1 そこで、ここではその経験の様子とその結果について、回想 1 1 から詳細に見ることにします。

リーダーハリス夫人の書いた「聖霊の満たしはどのようなふうに見えるのか」を、夜の11時まで息もつかずに読み通し、聖霊のみたしの道をはっきりと見い出しました。今までなにか神秘的な経験によって分かると思っていたのに、ここには神の言葉をただ信じて、安息することが書かれてありました。

そこで、ひざまづいて本に書いてある通り、三つのステップを行ないました。

第一に、神に無条件に降伏しました。このことは数日前にしたことでしたが、更に深く心の中の思いおいて全く降伏しました。即ち「思い」を献げ た。

1972年発行の共著「キリストのかおり」の中の小林誠一師著「バーネット先生の献身」によれば、「第一に献身。全身全霊を神の祭壇にささげ手離す。ことに『思い』を神にささげるようにしめされたそうである。『あなたがたのからだを、神の喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。』ローマ12：1」と記されている。

第二は、ロマ書6章、ガラテヤ2：10（20の間違いだらう）にあるように、自分はキリストと共に葬られ、甦るえらされたものだと計算しました。このことは十分わかりませんでした。御言葉どおりにしました。

1972年発行の共著「キリストのかおり」の中の小林誠一師著「バーネット先生の献身」によれば、「第二に、『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。』（ガラテヤ2：19：20）のみことばをそのとおり自分にあてはめて信じた」と記されている。

第三は、ルカ11・13の約束にしたがって、聖霊を求め、聖霊が私のうちに入られたことを信じ、聖霊が私を占領してくださったことを感謝しました。

そして、主が静かに私の中に入られたことを信じて、その夜床につきました。

その結果、以下の6項目を体験しました。

1) ようやく私の経験の中で "古いものがすぎさって、みよ、全てが新しくなった" という思いが入ってきました。

2) なにかわくわくさせる経験ではなく静かで平安と力に満ちた経験でした。

3) 神の言葉への疑い、高教会の考え方に傾くこと、世的な考え、などが夜の霧

が朝日のまえに消えるように、私の心の中から消え去っていきました。

4) 聖書は新しい本になった。

5) 祈りは楽しいものになった。

6) 神の導きに冷たく従う心の代わりに、心の底からまだ福音が伝えられない人々に神の愛をつたなければならいという思いが非常に強く燃え始めました。

7) 海外宣教への篤い思いは、回想を書いていた今日まで(もし、回想を書いた時が1945年頃ならば約40年間)燃え続けていたこととなります。

バーネットの聖霊の満たしの経験を要約すると以下のようなになるでしょう

第一に、神秘的な経験ではなく、霊的高揚を伴ったものでもなく、聖書の言葉を信じ、その言葉に安息し、静かで平安と力に満ちた経験である。し

たがって、神秘的な経験や霊的高揚を求めることではない。

第二に、聖書が誤りのない神の言葉であるとの確信に至った。

第三に、祈りが楽しいものになった。

第四に、宣教への重荷が与えられ、それは長く継続するものであった。

特にバーネットの聖霊の満たしの経験は、聖書が誤りのない神の言葉であるとの確信に至りました。先ほども触れましたように、15才頃から聖書批評学の強い影響を受けましたが、ここに至ってついに解放されたようです。

所謂今日でいう聖書信仰が明確になったのが聖霊の満たしの経験でした。

## 2 聖霊の満たしと聖書信仰の深まりについて

その後、バーネットの聖霊の満たしと聖書信仰の関係は深まりを見せていきます。

### 1 聖霊の満たしと「思い」のきよめ

1939年昭和14年4月3日第13回年会で、バーネットは「従うものに賜う聖霊」と題した説教の中で「はじめは思いです。思想が言葉となり、行為となります。思いがきよめられなければ駄目です。」「思いも頭も全く神のものにしな

いと、自分がいくら純福音のつもりでも駄目です。ある手紙の中でカナダの純福音といわれる正統派の人の説教を読みました。しかし聖霊の事がわかっていません。聖霊の満たしを信じないからこの人の中に近代的キリスト教が入ってしまいました。この人は純福音のために一番良く戦う闘将でしたが、聖霊なしに戦うことは出来ません。自分の立てた神学がいつしか間違ってしまった思想の世界がきよめられなければなりません。」と語っています。即ち、聖霊に満たしを経験し「思い」や「思想」や「考え」が潔められなければ、聖書信仰に立つことができないと述べています。聖霊の満たしを経験しないために「近代的キリスト教が入ってしまった」こと、そして、神学が間違ってしまったと語っています。

## 2 思想の製造所である思いと御霊の支配について

1956年(昭和31年)発行されたバーネットのロマ書8章5節の注解で、「この節で「おもう」と訳されている「フロナイン」という語は、英語にも、日本語にも、正しい該当語はない。これには思うと共に意志する事も含まれているからである。其は、何かについて考え、欲し、そして得ようと努める事を意味する。ゴデーはアスパイア(熱望、欣仰)という語で之を訳し、モールは「道徳的つながりを保ち、交わり睦む」と訳している。」と述べた後、「マシユウ・ヘンリーはこの節に関して次の様に記している。「我らが肉に循っているか、御霊に循っているかは、どうして知ることが出来るか。其は、我らが肉の事か、御霊の事か、どちらをおもうかによつてである。肉的快楽、世俗的利益又名誉、感覚的現世的物、これらは新生しない人々のおもうところの肉につける事柄である。神の恩恵、靈魂の福祉、永遠への関心、これらは御霊に循うもののおもうところの御霊の事柄である。人はそのおもうところの如くある、おもいは思想の製造所である。」と語っています。

従って、「思想の製造所」である「思い」が御霊に支配されなければならぬことを重要視しています。御霊に満たされて、思想の製造所である「思い」が御霊の支

配をうけなければ、聖書信仰は確立しないし、聖書信仰を維持することもできないと理解していました。

バーネット先生選集第一巻（説教集）128pで「信者の内住の聖霊を認めないことは、純福音を拒絶することであります。」

バーネットの信仰の第一の特徴は、聖霊に満たしが思想の製造所である「思い」の支配につながり、その結果、聖書信仰を確立すると信じたことだといえるでしょう。言い換えれば聖霊の満たしなしに聖書信仰は確たるものにならないと言うことです。ですから、バーネットにとって聖霊に満たされることは大変重要なことでした。

バーネット先生選集第一巻（説教集）によれば、特に年会（今日の聖会）における12の説教の内、聖霊に関する説教は8説教であり、いかに聖霊の満たしを大切にしていたかが伺えます。編者の石井正氏もまえがきの中で「年会説教の題目をごらんになれば、バーネット先生が、日本の教会に対して持っておられた重荷が何であったから直ちに分かると思います」と語っています。

### 第3章 自我の死と聖書信仰

では、道徳的倫理的な意味での内住の罪からの解放に関してはどうだったのでしょうか。

#### 1 自我の死

##### 1 回想11

内住の罪に対する敗北に関しての解答を見出したのは26才の時の第二ステップにあったと思います。このステップを信仰によって受け入れ、内住の罪に対する勝利、解放を得たものと思います。

回想3によれば、「私の生涯は『この死の身体から誰が救ってくれることが出来るだろうか』という一つの長い叫びになりました。」そして「残念ながらその回答に

ついて当時だれからも教えられていませんでした。そしてついにその解答を見出したのは26才(1904年)の時(回想11)でした」と述べていることから言えるでしょう。

## 2 回想16

しかし、聖霊の満たしを経験し、自我の死も信じたにも拘わらず、「1904年の聖霊の満たしの経験からもどることはなかったが、内住の罪から全く救われる経験はまだ受けていませんでした。」と語り、「回想18」の1915年のソニック聖会で「内なる罪から全く救われること信仰によって、経験し」「第一ヨハネ1：7とガラテ2：20の本当の意味を始めて経験し」ましたと述べています。又、この経験は回想18によれば、「1904年の危機の時とおなじぐらいはつきとした経験でした」と述べています。

従って、1904年26才で聖霊の満たしを経験した時の第二ステップ「ロマ書6章、ガラテヤ2：10(20の間違いだらう)にあるように、自分はキリストと共に葬られ、甦るえらされたものだ」と計算しました。このことは十分わかりませんが、御言葉どおりにしました。」と述べていることから、自我の死を経験し、内住の罪との戦いに勝利したはずですが、体験的には、聖書信仰の確立の方に傾き、再び、1915年の体験を経ることになったのでしょう。聖霊の満たしの経験が先で、内住の罪からの解放の経験が後になったという時間的なずれはあるものの、ローマ人への手紙、6章と8章に記されている聖化の消極的側面としての「キリストと共に死んでいることの確認」そして積極的側面としての「いのちも御霊満たされて生きる」という二つの経験をしたこととなります。

## 3 回想16

1915年のヨハネ第一の手紙1章7節の理解については、M・A・バーネット先生選集第三巻(聖書講義)ヨハネの手紙第一に以下のように詳しく記されています。

「『もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにはありません。』(1ノ8)

この罪は犯した罪(Sins)でなく状態の罪(Sin)であります。きよめる血潮がもう必要でないと言う人は、自分を欺いているのであります。『最もきよめられた信者とは、最も血潮を必要としている人』であります。私達は常に血潮がひつようであります。何故でしょうか。

1、原罪のため

2、心の純潔のため

罪から守れ、神との交際を持続するために、血潮は一生必要であります。この血潮を離れ、信じないと罪を犯します。一つの罪をきよめられて、次の罪を犯すまで血潮は必要がないと思う人は、罪を重ねてしまいます。『もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。』(1ノ9)

この罪は犯した罪(Sins)であります。これは言い表すとき赦され、きよめられます。『わたしをきよめてください』この『きよめる』というギリシャ語の動詞はエアリスト・テンスであって、この形は瞬間的に一度で完全にというのであります。犯した罪は一度で瞬間的にであります。赦されつつ、きよめられつつではありません。9節は『きよめ』の出発点であり、7節の『きよめ』それを歩むこと、継続であります。血潮の中に入らない人があります。また血潮の中に入ってもその止まらない人があります。

私達は血潮の中に入り(9節のきよめであり出発点であります)その血潮の中に常に留まり続ける Laydown すべきであります。(7節のきよめで、きよめをを歩み続けることあります)

4 きよめの継続的側面については

M・A・バーネット先生選集第一巻(説教集)第7回(1933年昭和8年)「聖



霊なる神様について」の中で「信じた瞬間に救われます。『きよめ』も『聖霊の満たし』も救いと同じく、信じた瞬間に受けることができます。瞬間に一度のなされます。その後は信じつつ、信じつつ、信じ続けるのであります p - 135」と述べていること事の体験であったと言うことでしょう。

2 スオニック聖会の説教とは、

バーネットが聖霊の満たしを経験できたのはリーダーハリス夫人が書いた小冊子の影響でした。リーダー・ハリス夫人とは、リーグ・オブ・プレイヤーの創設者リーダー・ハリス師の奥さんです。

しかも、スオニック聖会の主催者で協賛者はJEBです。そしてJEBはケジック聖会開催中そのビジョンが与えられ1903年に設立された宣教団体です。

ですから、スオニック聖会はケジックと同じ神学的立場をとっているものと考えられます

ケジックとは、個人的、实际的、聖書的ホーリネスです。それは又、御霊による維新であり、静かな献身、聖霊による謙遜、明確なキリスト信仰、純性(Simplicity) 霊性(Spirituality)特性(Singularity)であります。

そして、その聖化は、対抗、中和説(Counteraction)の立場をとります。

ではスオニックのメッセージとはどのようなもだったのでしょうか。

パゼット・ウイリクス「神の絶大な力」第13章によれば、

- 1、聖書的な聖潔をまず第一に教える集会である
- 2、全き聖潔として知られている経験は回心の次に心の中で起こる恵みの明確な第二の業である。
- 3、この恵みの業は二点である。

第一は内住の罪からの聖潔、

第二は聖霊の到来すなわち内住であり、信者に 主イエスをすべてのすべてとする。 p - 205

これこそ、1915年バーネットがスオニック聖会で経験したものでした。

## まとめ

聖書信仰とは、聖書66巻は科学的に歴史的に誤りが認められないから、誤りがないと告白することではありません。聖書が聖霊の特別な働きである靈感の働きによって書かれたので（聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。 テモテ3：16）誤りがないとする立場です。

福音伝道教団の信仰告白（旧新約聖書六十六巻は、神の靈感によるもので誤りのない神のことばであり、救い主である主イエス・キリストを示し、信仰と生活の唯一の基準である。）のとおりです。

従って、聖書信仰の継承は、基本的に理性による知識の伝達では成り立たないものです。その意味で教育では継承は難しいでしょう。聖書学院で聖書信仰の継承をどうすべきなのでしょう。単なる知的な訓練ではできないのです。バーネットは聖霊の満たしを経験して聖書が誤りのない神の言葉であるとの確信を得ました。即ち、聖書信仰とは聖霊の満たしの経験によって確立すると言えるでしょう。ですから私達は聖書信仰の継承を聖霊に満たしの経験によってなすべきではないのでしょうか。

この点でもう少しバーネットの信仰の特徴の理解を大切すると共に強調していくべきではないのでしょうか。

次に、聖書信仰とは、教憲の第一条にあるように「信仰と生活の唯一の基準」とするものです。聖書が信仰生活の唯一の基準であるということは、聖書の御言葉に従って生きることです。それは神の御心を第一にして生きることです。神の

御心を第一にするということは、私の願いを第二第三にすることです。この点において、バーネットが発見した「思想の製造所」という「思い」の深みにまで、神の御心の領域を拡大し、浸透することが求められるべきでしょう。それによって、日本人の精神構造の福音化、言い換えると本当の福音化をうながすことができるでしょう。

さらに、イエス・キリストはルカによる福音書 9 章 23 節で「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われたように、イエスに従う道は自分を捨てることではないでしょう。言い換えれば、自分の考えや生き方を捨てることです。言い換えれば、自我に死ぬことでしょう。自我に死ぬことなしに聖書の言葉に生きることはできないし、神第一の生活も成り立ちません。もし、そうでないならば、聖書信仰とは掛け声ばかりで実質のないものとなるでしょう。それですから、聖書信仰を大切にすれば、バーネットが求め続けた、自我に死ぬことと、聖霊に満たされることを大切にしなければならいでしょう。

その意味でバーネットに与えられた中央日本の宣教の課題と、さらには日本宣教の課題とは、聖書信仰の確立であったと言い換えることができるでしょうし、批判を恐れずに敢えて言うとしたら、聖霊の満たしと自我の死を基として、内住の罪からの解放をもって可能とすることができるということではないでしょうか。

ではこの戦いは救われる以前の戦いだったのでしょうか。それとも、救われた後の戦いだったのでしょうか。

バーネットは、ロマ書 7 章 7 節から 25 節のところで以下のように注解しています。

「この箇所を理解する鍵は、八章にかくも数々出て来る聖霊の名が、こゝには一

度も出で来ない事実を注意するにある。キリストの名も二五節まで出て来ない。故に、我らは、七節から十三節までは、罪の自覚は得乍らもまだ新生していない人、即ち、性来のまゝなる人（コリント前二・十四）の経験、十四節から二四節までは救われはしたが、まだ、肉に従って歩んでいる肉적クリスチャンの経験として考うべきである。コリント前三章一節一三節参照。」

すると、回想3の「私の生涯は『この死の身体から誰が救ってくれることが出来るだろうか』という一つの長い叫びになりました。」とローマ人への手紙7章24節の言葉を引用していることから、この叫びは聖霊に満たされていないクリスチャンの叫びと理解することができるでしょう。

そうすると、恐らくバーネットの救いの経験は7才の時でしかも、救いと同時に、内住の罪との戦いを経験し始めたことになるのではないのでしょうか。

しかし要は、救いの経験と同時か、それとも、その経験にかなり近い時から始まったと言えるでしょう。